

ITL NEWS

No.57

学生へのフィードバックの工夫

フィードバックとインタラクションを効果的に行うには

立命館大学教育開発推進機構教授 中島 英博

2020 年度から全学的に取り入れられたメディア授業について、本学ではコロナ禍の学びの実態を明らかにするためのアンケートを複数回実施してきました。その分析から、フィードバックをしてもらっている学生ほど受講満足感が高いこと、および、フィードバックのある授業は課題等の負担感が大きいと感じていても受講満足感が高いという傾向がわかりました。たとえば、「Web 授業*が受講生に満足感を与えるためには、適切なフィードバックを返すことが不可欠である」(ITL News No.50)、「十分なインタラクションやフィードバックを心がけながら、適切な量の授業外学習を促し、学生の能動性を高めることが学習充実感に重要」(ITL News No.53) などの知見です。

上記のアンケートにおいて、フィードバックは「この授業では、質問や課題・小テストに対する適切なフィードバック(回答・解説・コメント等)が十分に行われていましたか」という項目で把握されています。多様な具体例がある取り組みであり、既に多くの教員が何らかのフィードバックを授業の中で行っています。一方で、教員からは「具体的に何をすればよいかわからない」「毎回の小テストの結果について次の授業で補足説明をしているが、このやり方でよいのか自信がない」といった声も多く聞かれます。

2022 年度は対面授業の機会がコロナ禍以前に戻りつつあり、メディア授業の頻度は減る傾向にありますが、効果的なフィードバックの方法については、継続して高い関心が寄せられています。2022 年度の第 1 回教学実践フォーラムでは、総合心理学部の谷先生と生命科学部の松村先生に登壇いただき、授業の中でフィードバックとインタラクションをどう進めるかについて、各先生の授業の事例を交えて具体的に紹介いただきました。その詳細については、各先生の記事をご覧ください。ここで確認しておきたい点は、フィードバックやインタラクションは単なる技法ではなく、担当教員の信念や態度によってその効果が大きく変わるという点です。登壇した両先生は共に、次の 2 つの点を重視していました。すなわち、授業の開始段階ではすぐに答えられる簡単な発問を心がけ、学生が反応や発言をしやすくする点、および、発問に対して反応がない場合も待つことによって、発問には反応するものというクラスの雰囲気を作れる点です。これらの事例が、今後の授業実践において、多くの教員の参考になることを期待します。

* 2022 年度より、「メディアを利用した授業」という名称に変更されました。本文中では「メディア授業」と表記します。

楽しくインタラクションをする：Antecedent-Behavior-Consequence を使って

立命館大学総合心理学部教授 谷 晋二

CBS の物事の捉え方

私は文脈的行動科学（Contextual Behavioral Science; CBS）の研究者です。おおざっぱに言うと、CBS の科学者は物事を状況によって多様に変化するものであると捉えています。科学者の役割は物事を観察できる出来事から予測し、それに影響を与える要因を記述することです。今回のテーマである授業での学生とのインタラクションの問題を考える場合にも、この立場は変わらないので、私にとって授業をすることは CBS という科学の実践の場です。

CBS では、個人（あるいは集団）と環境との相互作用を検討していきます。そして、環境を変化させることで個人の行動に影響を与えようとしています。授業でのインタラクションを考える場合に適用してみましょう。教師の問いに答えることや、質問すること、課題や振り返りのコメントを提出するなどの学生の行動はインタラクションの一部です（もちろん、講義の妨害をするような行動もインタラクションの一つでしょう）。この行動に影響を与えている環境的な要因にはどんなものがあるでしょう。それを記述してみましょう。

ABC

環境と個人との相互関係を記述するときに使われるのが行動分析学や関係フレーム理論などの理論ですが、簡単に説明すると ABC を考えるということになります。A は先行事象で、B は行動、C は結果です。ABC を記述することは、時間の流れに伴う関係性を記述することで、A と B と C はセットになった 1 つの分析ユニットです。さて、授業中のインタラクションの ABC を考えて行きましょう。まず B に「発言する」という学生の行動を入れてみましょう。B を増大させたいという目的に対して、どんな環境を設定することが有効でしょう。例えば、発問をするという教師の行動は、A にあたるでしょう。C にあたるのは行動の結果となる環境の変化です。教師が発問をし（A）、学生が答える（B）、そして教師は学生を褒めることが（C）にあたります。その結果、B の行動が増加していくなら、この ABC はうまくいっていると考えられます。逆に、行動が増加していないなら、この ABC は学生の発言を増やすという目的に対して、うまくいっていないと考えられます。

ABC の工夫

実際に、A の工夫として行っているのは、1. 発問をすること 2. 待つことです。2 の「待つ」というのは、とても重要な先行事象の操作です。たびたび経験するのは、発問をしても、誰も学生が答えないという事態です。教師にとって、これは嫌悪的な状況ですから、我慢できずにすぐに誰かを指名して答えを言わせたり、教師自らが答えを提示してしまったりするかもしれません。そうすると、学生側からみると、無反応でいることは、誰かが答えてくれる、教師が答えを言うという結果を伴うので、発言することが減少していくかもしれません（これも学生と教師とのインタラクションの 1 つです）。「待つ」ことで、学生の発言する行動を促進するには、「期待に満ちた顔」で待つということが必要です。そして、それでも発言がない場合には、いろいろなヒントを提示するようにしています。「さっき、お話ししたエピソードを覚えていますか？」「スライドの 5 枚目を見てみましょう」とかを提示するようにしています。もちろん、発問の難易度はとても重要な変数の 1 つです。学生の発言する行動のレベルが低い段階で（授業の 1, 2 回目など）、学生にとって難度の高い質問をすると、うまくいかない ABC（インタラクション）が増加していくでしょう。

次に、学生の行動（B）です。学生の行動にも行動のしやすさがあります。対面での授業では、多くの場合に「発言する」や「手を挙げる」という行動の形が求められます。この 3 年間オンラインでの授業が進む中で、異なる形態の行動による発言ができるようになりました。チャットや Slack などのコメントの書き込みやリアクションボタンです。今年から Slack を使っていますが、顕著に学生の発言（書き込み）回数は増加しました。学生の行動のしやすさはインタラクションの大変重要な変数の一つだと思います。

最後に C にあたるのが、教師の反応です。行動分析学は、結果（C）の即時性が行動（B）に大きな影響を与える変数であることを示しています。学生の発言行動に対して、即座に応答することが、発言行動に影響をします。もちろん、教師の応答が嫌悪的なものであれば、発言行動は減少するでしょうから、常に「yessing」を行います。具体的にどこが良かったのかを言いながら、例えば「とても面白いアイデアです」などの肯定的な結果を提示することが重要です。チャットや Slack などでは、「良いね」ボタンなどのリアクションを学生同士で行わせるのも、即時的な結果の提供となるでしょう。

これからの課題

ABC の操作によって、インタラクションは増加するでしょう。少なくとも私の授業では、授業中の発言や書き込み回数は著しく増加しました。授業は、それぞれ異なった目的を持っています。例えば私が担当する障害児・者心理学という授業では「障害の問題をダイバーシティの問題として検討することができるようになる」ということが目的の1つです。インタラクションが増加すると、この目的は達成されやすくなるのでしょうか。インタラクションの多い、ときには面白おかしい授業は、学生の満足度を向上させるでしょう。しかし、授業本来の評価は、授業の目的の達成度にあります。インタラクションを増加させる方法を検討するとともに、授業目的の達成度との関連を検討していくことが重要な点だと思います。

授業内外での学生へのフィードバックの試み

立命館大学生命科学部教授 松村 浩由

緒言

学生に対して授業でどのようにフィードバックすれば良いか、そしてコロナ禍で顕著になってきた「多様化」にどのように対応したら良いかは非常に難しい課題です。これらの課題に対し、筆者は授業内外での学生へのフィードバックを試みています。まだ不十分であることは認識しつつ、それらの試みについて教学実践フォーラムで発表しました。

発表内容

講義での実践例として、①講義資料、②対面&ライブ配信型授業、③アーカイブ、④レポート、⑤質問に対するティーチングアシスタント（以下、TA）からの回答、⑥授業内でのフィードバック、⑦授業内試験について紹介しました。以下、①～⑦について簡単に述べます。まず①については、講義で使用する資料を授業で伝える予定のセリフが入ったスライドという形で少なくとも一週間前に掲示しています。学生に予習を促すためです。②については、現在は対面&ライブ配信型のハイブリッド型の講義を Zoom で実施しており、同時に録画しています。これによって、発熱や濃厚接触の疑いで授業に参加できない学生に、体調が許すようであれば Zoom での授業参加を促すことができます。また、体調不良で Zoom でも授業に参加できなかった場合には③アーカイブの閲覧を促すこともできます。そして授業中に、「パパパコメント」や「CommentScreen」というアプリを使用し、学生からの質問を匿名で随時受け付けます。これにより、学生がコメントしやすくなる（敷居を下げる）効果を狙っています。そして、④については、複数回の講義に対してレポート提出を指示し、そのレポートには、講義内容のまとめ、興味をもったこと、調べたこと、理解できなかったことや疑問に思ったことを書かせています。それらのレポートで学生が書いた「理解できなかったこと」などに対して⑤ TA からメールで回答を送信してもらいます。ここでは、まず TA が回答を私に提出し、私が修正したものを TA から学生にメールで送信します。同時に、学生から多かった疑問・質問などについては⑥授業内でフィードバックするように心がけています。そして、学生の勉強意欲の向上を狙って、⑦ manaba+R の機能を利用したドリルや筆記式などの授業内試験を複数回実施しています。

このように様々な手段を講じてはいるものの未だに試行錯誤が続いている状況でもあります。そして授業では常に学生には、「対面で自分の意見を述べられる力をつけてほしいこと」と「まだ答えが分かっていな

1) 講義資料を一週間前に掲示

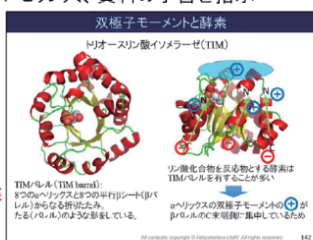
講義資料はスライド+セリフ入、資料の予習を指示

普段から伝えていること

- (1) この学習が何に繋がるか(具体例)
- (2) 大学では、「既知」と「未知」の境界を知る
- (3) 最終的に、対面で自分の意見を述べられる能力を身につけてほしい

(4) 能動的に学ぶ重要性、授業で伝えられることは限られている

例：自分で調査、ChemDraw等を自分のパソコンに導入



4) レポート提出

複数回の講義に対してレポート提出を指示

- (1) 講義内容(講義資料をまとめる)
- (2) 講義の中で印象に残ったこと、関心を持ったこと、自分で調べてみたこと等
- (3) 講義について、よく理解できなかったこと、疑問に思ったこと等

修士課程1年生のティーチングアシスタント(TA)の##さん、あるいは先生からメールで返事があるかもしれませんので、もしメールがきたらそのメールに対して返事してもらえると嬉しいのです。よろしくお願いします。

いことを考え続ける力を身につけてほしいこと」を伝えていると述べ発表を終えました。

大学の役割

発表後に、様々なご意見とご質問をいただきました。その中で、「考え続ける力をつけてほしいということに関して、どのような言葉かけや投げかけ、フィードバックをされているのか」という質問をいただきました。その質問に対して私は、「大学では既知と未知の境界を学ぶ」ということをまず伝え、例えばある未知の現象に対して、私を含めおそらく誰もわかっていない、でもこんな可能性があるかもしれないという問いかけをするようにしていると答えました。つまり、授業の意味や考え方をアナログ的に伝えることが重要ではないかという提案をお伝えしました。今回のフォーラムは、このような大学の役割についても考えさせられた有り難い機会となりました。



立命館大学教育開発推進機構 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL : 075-465-8304 FAX : 075-465-8318 email : fd7lcer@st.ritsumei.ac.jp <http://www.ritsumei.ac.jp/itl/>

発行日 : 2022 年 8 月 編集・発行 : 立命館大学 教育開発推進機構